

## 選 評 「“ジャンル” に対する意識を」

藤田 のぼる

作品を書く時に、自分の書こうとする作品がどういう“ジャンル”に属する作品になるのかということは、やはり一応意識する必要があります。まずは「短編」なのか「長編」なのかということがありますし、童話なのか小説なのか、怖い話なのかほのぼの系なのか、純文学(この頃はあまり使わない言葉ですが)系なのかライトノベル(的作品)なのか等々、ジャンルというのいろいろな区分けのしかたがあります。「恩田陸風作品」とか「あさのあつこ風作品」とか、はたまた「星新一的作品」とかいうように、好きな作家の作風に沿った形で意識するのもいいでしょう。

「一応意識する必要がある」と書いたのは、ジャンルはあくまでジャンルでしかなく、それに捉われすぎてしまってその人の持ち味を殺してしまっただけではなんにもなりません、それはまあある程度書けてからの話で、やはり基本的に自分の作品の「路線」は意識することが重要です。着ていく服を決める時だって、今日はなに系で決めようと一応ベースは定めて、その上でいろいろ冒険をするという順序だと思いますが、それと同じ？です。

まず「短編」と「長編」ですが、このコンクールの募集要項とは少しずれますが、短編というのは400字原稿用紙で、大体20から30枚くらいまで。その中でも3枚とか5枚という短い作品は掌編とかショートショートと読んだりします。一般に長編というのは一冊の本になるくらいの長さで、ですから概ね100枚以上とっていいと思います。その間の50枚とか60枚といった長さは「中編」と読んだりします。同じ文学作品でも、短編のおもしろさと長編のおもしろさは相当に別物で、このあたりは実際にさまざまな作品を読んで、体感してください。

さて、今回の最優秀作品「人魚のいたプール」は(募集要項的には長編ですが)「中編」ということになると思います。この長さは下手をするとどっちつかずになるのですが、この作品は逆に短編的な切れ味と長編的なストーリー性の両方を備えた、大変すぐれた作品でした。中学や高校の「部活」は、YAの分野を中心にとっても取り上げられることの多い題材です。この作品では、いささか微温的な水泳部に、明らかにレベルの違う新生が入ってくるところからドラマが始まります。主人公を、同学年ではなくて、三年生のキャプテン役にしたのもうまいと思いました。反発、疑問、興味、保護……、さまざまな思いが主人公の心をよぎります。そして、もう一つこの作品のすぐれているところは人物配置で、主人公を含む三人の三年生、主人公の幼なじみの男の子など、この長さとして多くも少なくもない登場人物たちです。途中のファンタジックな場面にも違和感がなく、物語作りを心得た作者だと思います。但し、ラストの場面は、もっと長い長編ならともかく、かえってこの作品の切れ味を損ねているように感じました。

優秀作品の「器用貧乏」は、短編としてのシャープさと独特の世界観を感じさせる、魅力的な作品でした。佳作の「そして、勇者は来なかった」は、169枚という文字通りの長編作品でした。長編としての骨格は備えているものの、もっともっと物語のダイナミックな展開がほしかったと思います。